

半世紀を越えて

（上）

北海道倶楽部回顧録

北海道倶楽部常務理事

辰野清隆著

（役職は当時）

会報「北海道倶楽部」平成十四年三月から平成十五年八月までに連載した15の記事のうち平成十五年十二月号までの9回を（上）として再掲した。以後の記事は別の機会に掲載する。著者は辰野清隆さんである。表記の年数等記事は原則として、掲載時のままとした。

（注）は編集者の独断で記した。

北海道倶楽部の記録 「半世紀を越えて」

北海道倶楽部のあゆみ

- 昭和 2 年 「北海道倶楽部」の創設（新渡戸稲造などが会員として結成）
- 昭和 23 年 戦後、新生「北海道倶楽部」の設立総会、会報「北海道倶楽部」を創刊
- 昭和 37 年 北海道人交歓パーティー開催参加者400人
（現在の交流イベント「WeLoveHokkaido」）
- 昭和 41 年 社団法人北海道倶楽部正式認可
- 昭和 42 年 北海道倶楽部所有の不動産を処分し北海道開発庁の職員寮寄付
開道 100 年と冬季札幌オリンピックにあたり北海道に国際空港を設置運動
- 昭和 43 年 北海道倶楽部特別基金募集、北海道東京事務所 4 階増築整備および開道 100 年記念事業の費用拠出
- 昭和 44 年 北海道勤労青少年センターが発足
- 昭和 46 年 旭川国立医科大学の誘致運動展開、真駒内屋外スケート場前に札幌オリンピック・モニュメントを建設、寄贈（雪華の像 本郷新制作）
- 昭和 47 年 第 1 回北海道産業視察ツアーで道内政財界人と交流（平成元年まで 14 回実施）
- 昭和 52 年 有珠山被害義捐金街頭募金 543 万円
- 平成 2 年 北海道開発庁 40 周年で開発功労表彰
- 平成 7 年 「北海道開発に関する提言 11 項目」堀北海道知事へ提出
- 平成 8 年 「北海道・ゆめプラン」提言募集倶楽部は東京事務局として論文募集を担当
- 平成 9 年 ふるさと活性化フォーラム開催
北海道自然体験学校「開催倶楽部は東京事務局として参加者募集を担当
- 平成 10 年 シンポジウム「北海道を考える」経団連会館で開催
- 平成 11 年 北海道の自立をめざす提言書「いま、北を考える」を道知事、北海道開発庁長官に提出
- 平成 12 年 有珠山被害義捐金を募金
- 平成 14 年 「北海道倶楽部を語る会」を立上げ、倶楽部活性化策などにつき検討
- 平成 15 年 台風 10 号による日高被災者支援募金
- 平成 20 年 ふるさと北海道応援大使、大使館活動開始
ふるさと納税キャンペーン開始公益事業の強化
創設 60 周年を記念してロゴマーク制作
「ふるさと納税キャンペーン」ギフト制度開始
「北海道情報ラック」開始
- 平成 21 年 秋葉原で情報展示イベント
広報紙「北海道 Now」増刊号刊行
北海道で提案募集コンテスト開始「北海道のためにわれわれはなにをすべきか」
- 平成 22 年 北方領土返還推進ブラウンリボンバッジ・早期実現新幹線バッジ頒布開始
北方領土返還ノサップ岬マラソン大会協力開始
代々木北海道フェアに出展開始、情報展示イベント
- 平成 23 年 CD「ちぎれ千島に雲が飛ぶ」頒布開始
1972 年札幌五輪「雪華の像」（本郷新）補修
- 平成 24 年 ふるさと納税寄附者に感謝状贈呈（交流イベント時）
- 平成 25 年 新事務所完成・移転、北方領土返還「千島桜」シンボルバッジ 配布開始
- 平成 26 年 公益社団法人移行、寄附のお願い（寄附税制適用）
- 平成 27 年 ふるさと納税制度開始から行っていたギフト制度を役割終了のため終了
- 平成 28 年 「北海道 NOW」に北海道自治体の紹介を連載開始

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

①

創立時の群像

野口氏ら多士濟々

倶楽部の内容、事業形態などに変な違いがあります。そのことをご理解のうえ読んでいただきたいと思ひます。

北海道倶楽部会報に、このたび倶楽部の歴史を書き残すことになりました。それは、このままでは私たちの先人が築いた輝かしい倶楽部の歴史が、忘れられてしまう恐れがあるからです。

私は昭和三十六年、倶楽部に入会を許され、四十四年に若者の代表として理事に推され就任しました。現在最も古い理事であります。

四十年も昔のことで、記憶に多少の間違ひがあるかもしれませんが、倶楽部の古い会報や文書などに正確と思われることが間々あります。そこで日時、数値をできるだけ調査し、その折々の話題などを優先して取り上げるつもりです。

倶楽部の創立は昭和二十三年で、今年で、五十四年になります。(注一) ちようど半節となる昭和五十年を境に、その前半と現在に至る後半とは、

倶楽部の内容は、事業形態などに変な違いがあります。そのことをご理解のうえ読んでいただきたいと思ひます。

私が入会した三十六年当時、倶楽部の事務所は、歌舞伎座の向かいの辨松ビル(後に北海道ビルと改称)の三階にありました。その頃の銀座界隈は、木造のバラックが立ち並び、戦災の跡が色濃く残っている状態でした。

倶楽部の会員は北海道出身者、または北海道にかかわりのある人で、主として東京在住者の中で成功者といわれる人の集まりで、その会員になることは、憧れであると同時に大変名譽なことと思われていました。

私は現代建築の大御所、板倉準三先生のもとで、名建築といわれた多くの作品にかかわることができ、そのおかげで、昭和三十六年、三十一歳の時、「日本建築家協会」の全国最年少会員になることができました。

また、たまたま竹中工務店に勤める先輩が倶楽部会員で、彼に紹介されて北海道倶楽部に入会したわけです。

倶楽部には、創立当時の主な方々をはじめ、多くの会員が連日集まり、懇談の場として温かい雰囲気、一番若い会員の私に、創立当時の苦労話や、会の現状、今後のことを話され、同時に雑用もいろいろ申し付けられたものです。

よく倶楽部でお目にかかった方々として、創立最大の功労者野口保元先生(東京講演会理事長、北海道友の会会長、早大校友会理事)、北海道新聞東京総局長野口小太郎、新橋踊舞場支配人丸山喜次郎、国策パルプ会長南喜一、芸術院会員で彫刻家加藤顕清、サッポロビール社長松山茂助、作詞家高橋掬太郎、フジテレビ社長鹿内信隆などの各氏が思い出されます。

昭和23年スタート

その頃の倶楽部は、人的繋がりを大切にすると共に親睦を深め、自己の利益に関係なく北海道の発展をひたすら願う人の集まりでした。そんな考えのもとに倶楽部の事業が行われていたのです。その頃の倶楽部の雰囲気や様子を、拙稿によって知っていただきたいと思ひます。

次回以降は創立の頃、歌舞伎座前辨松ビルに倶楽部事務所開設(二十四年)鹿内信隆氏、理事長に就任、「道産子の会」、ゴルフ同好会などスタート(三十七年)倶楽部事務所現北海道東京事務所に移転(三十九年)開道百年記念に倶楽部が「第一回北海道美術家展覧会」を三越本店で開催(四十三年)札幌冬季オリンピック開催決定後、倶楽部が中心となって、「日本ボブスレー、トボンガ協会」設立(四十二年)真駒内オリンピック会場に本郷新制作のモニュメント寄贈(四十七年)太田剛理事長就任の頃(四十五年)などを中心に書いていきたいと思います。(注一) 創建は戦前、昭和二年

北海道俱樂部が創立された昭和二十三年当時は、戦災で焼け野が原の中、食糧をはじめすべての物資が統制で、現在では想像もできないさまざまな世の中でした。

街には戦災孤児やホームレスがあふれ、東京への転入は、進駐軍要員か学校入学者以外は一切認められず、防空壕を住居にする人もたくさん居て、都心の焼け跡にはいも畑が広がっている状態でした。

こんな大変な時代に、先輩の方々が北海道俱樂部の設立を企画されたのです。呼び掛けの中心は、野口保元先生で、東京講演会を主催されていた関係で、政財界に知り合いが多く、その呼び掛けに応じ、発起人会が出来ました。

創立総会は昭和二十三年三月六日、現在の興銀本店の所にあつた丸の内永楽クラブで開かれ、北海道各界から約百人が出席されました。

総会では発起人がそのまま理事役員に指名され、発起人代表で、長く

半世紀を越えて

北海道俱樂部回顧録

②

拓銀の頭取をされていた永田昌緯さんが理事長に選出されました。

永田さんは「北海道俱樂部を在京北海道人によつて結成し、一丸となつて、北海道はもとより、我が国の復興に寄与しよう」とあいさつされ、それが俱樂部の運動方針になりました。

俱樂部会報創刊号には、行動目的について、次のような宣言が掲載されています。

権力の排除を宣言

「北海道俱樂部発足の意味するものは、自由なる意思による建設に向かつて、前進を約束するものである。まず常設のクラブ室を持ち、お互い常時集まり、啓蒙に当たることを第一目的とする。そこではお互い胸襟を開いて政治、経済を語り合い、教育、文化を談じ、その中から抑圧や権力によつて左右されることのないことを理想とする北海道を建設する

ことを目的とする。」

難しい言い回しですが、戦時中結社の自由が無かつたことから、このような文章になつたのでしよう。

俱樂部発足を知つた人の入会申し込みが相次ぎ、まもなく会員数約三百人に達しました。当時の入会金は五百円、年会費千円（公務員の月給が五百円程度）でした。

宣言書にもあるように、常設クラブ室を設けることが必要でしたが、なにしろ東京は焼け野が原、焼け残つた所はほとんど進駐軍に接収され、満足な建物がなかった。

しかし銀座界隈では不思議に北海道新聞のビルは焼けずに残つていました。そこで道新総局長野口小太郎さんのご好意で、道新ビル四階を仮事務局にすることができたのです。

野口さんのお話では「常時二十人ぐらいの会員が集まり、さながらサロンのような感じだ」といいます。



仮事務局が置かれた
東京・銀座の
北海道新聞旧社屋

年会費は千円

この頃、道新事から、東京事務所にする適当な建物が無いかと俱樂部に相談があつたのです。

このとき俱樂部会員だった新橋演舞場支配人の丸山喜代次郎さんが、いい情報を持つてこられ、これをもちに歌舞伎座前の辨松ビル買収交渉が始まつたのです。

設立総会

北海道俱樂部の記録「半世紀を越えて」

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

③

事務所開設

現在、北海道倶楽部は北海道東京事務所四階にあります。倶楽部が道庁のお世話で、ここに事務所を構えることができたと思われている方が多いかもしれません。

当初のいきさつからいうと、実は違うのです。昭和二十三年、焼け野が原の中で残っていた歌舞伎座前の辨松ビルを、道庁の依頼により倶楽部が四百五十万円で買収する話をつきました。

その後猛インフレで、価格が数倍になったこの建物を「原価」で「買収する権利」を道庁に譲ったことで、



「辨松ビル」があった
東京・銀座の歌舞伎座界隈

その三階八十坪の使用権を得たのです。

道庁が現在の永田町に移るとき、このビルを売却して庁舎建築費に当てたのですが、その詩の経緯は後述します。

昭和二十三年ごろは、道職員が上京するにも、今でこそ人気がSLですが、石炭の油煙で真っ黒になって東京に着くありさまで、事務所も宿

銀座辨松ビルを買収

も満足に無かったことから、知事から東京事務所になるビルがないかと倶楽部に相談がありました。

倶楽部も事務所兼集會室を探していましたが、そこにたまたま新橋演舞場の支配人をされ、理事だった丸山喜代次郎さんが、「辨松」がビルを売りがついているという裏情報を得たのです。

「辨松」は、戦前歌舞伎座や演舞場の茶屋として、弁当などを提供していたのですが、食料統制のため長

く休業していました。

当時は事務所ビルの売り物などほとんど無い時代で、とにかく買収しようと、丸山さんが手付金五十万円を立て替えて支払い、権利を確保

道庁からも是非にという話があり、四百五十万円で買い取る話を付けました。

面倒だったのは、中に住んでいる人の立ち退き料で、これも丸山さんのお世話で九百万円で話がつき、空き家にすることができました。

この頃は猛烈なインフレで、内閣統計局の資料によると、貸室の賃料は二十三年一年で五・五倍、二十四年までの二年間に二・二倍という状態で、辨松ビルを三千万円という買い手が現れたほどです。

道の予算執行には道議会の承認が必要で、倶楽部で資金を借り入れて確保しようという動きを始めたとき、道から送金があり、「辨松」に支払うことができました。

これにより二十四年、一、二階は道庁で、三階は倶楽部が入ることになりました。倶楽部が買収の話をつ

け、「原価」で道に提供したのですから、使用権は当然のことと双方が認め、何等問題はありませんでした。

この結果、その後の倶楽部活動に計り知れないプラスになったわけで、このビル取得のため、献身的に動かれた丸山喜代次郎さんの功績は、長く顕彰されるべきものです。

丸山理事が奔走

倶楽部のテーブル、椅子は特注で作り、今も談話室にその一部が残っていますが、百人ぐらいい入る会議室が出来ました。その頃なかなか手に入らなかったコーヒーや砂糖を持つてくる人もあり、会員の間で、「倶楽部のコーヒーは、東京「旨い」と評判になったほどです。だからというわけではありませんが、連日会員が集まり、情報交換の場として賑わいました。真のクラブの装がそこにあっ

たと思います。

今回は、北海道開発庁の職員宿舍用地を倶楽部が買い付け、無償で開発庁に貸し付けた話などを書きたいと思えます。

北海道ビルになった「辨松ビル」三階の北海道倶楽部には、人の集まる所の少ない当時のこととて連日賑わい、まさに倶楽部らしい活動の場になっていました。昭和二十四年ごろのことです。その後倶楽部発足を知った人が続々入会され、まもなく会員数五百人、二十五年末には六百人にもなりました。

二十三年発足当時の会費は入会金五百円、年会費千円。二十四年には入会費二千円、年会費千二百円、二十五年には維持会員制度（法人会員）ができ、一口年三千円でした。三十年ごろ維持会員は七十八社、二百四十一口になりました。それと同時に年会費一括一万円を払うと、以後の年会費免除の特別会員（終身会員）制度もでき、二十六年に二百一名を数えました。

維持会員の登録者も正会員費を払っており、この制度は昭和四十年ごろまで続いたのです。二十六年ごろの大卒銀行員の初任給は三千円ぐ

らいて、猛インフレの時代とはいえず、倶楽部の財政は案外豊かだったので

昭和二十五年、いろいろな事情から北海道の開発事業は国直轄となり、北海道開発庁が発足しました。初代長官は増田甲子七氏、次官には岡田包義氏が就任されました。

嘘のような話ですが、発足間もない開発庁は、組織も予算も整備されていない貧弱なありさまで、何かあると東京のことは倶楽部に頼ってこられました。開発庁ができて、道庁

から多くの職員が東京に転勤することになり、職員宿舎が必要になったのです。

しかし開発庁には宿舎用地の予算がなく、倶楽部でなんとかしてもらえないかという、今では信じられない話で、小石川林町（現文京区千石二丁目）に六百坪の土地を六十万円

で倶楽部が購入し、開発庁に無償で貸したのです。

開発庁は北海道から建築資材を運び、ここに十数戸の転居者用住宅を確保しました。後に建物を建て替えるため、この土地を処分することになりましたが、今倶楽部が持っている基金二千万円は、このときの売却代金です。

戦前、多くの府県では元殿様といった人が、人材育成のため、東京で学生を書生という形で面倒をみていました。

殿様がない北海道では、本郷に学生のための北海道学生寮が作られました。後の理事長鹿内信隆さんも、早稲田時代にお世話になったということ

です。しかし、戦災で消失、戦後鹿内さんはじめ倶楽部有志の骨折りで、新宿・東五軒町の焼け残りの建物を買取、学生寮が再建されたのです。遠く故郷を離れて東京で暮らす学生に大変喜ばれました。

本当は有志ではなく、倶楽部の事



現在の北海道開発庁（現総務庁）職員宿舎（左側）

倶楽部が用地買収

有志が学生寮も

業にしてはどうかという提案があったのですが、一部の反対があったため、やむをえず有志が手掛けたのです。後に北海道在京学生後援会が、練馬区上石神井に八百坪の土地を取得し、北海道学生寮が建設されました。最近、鉄筋コンクリート造り、七十七の個室を持つ建物に改装され、現在に至っています。倶楽部創立三十周年記念座談会で、理事の佐藤正義さん（株）北海道熱供給公社社長（当時）が、「この倶楽部事業は有意義でクリーンヒットだった」と発言しましたが、これは佐藤さんの誤解で、有志による事業だったのです。

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

④

開発庁宿舎

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」

北海道倶楽部の記録 「半世紀を越えて」

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

⑤

事務局移転

昭和三十年代「もはや戦後ではない」「所得倍増」の掛け声とともに、世の中は、貧しいながら落ち着きと希望に満ちた時代でした。

北海道倶楽部でも様々な行事が企画され、その盛んな活動は目を見張るほどでした。

昭和三十四年、道民の信望篤い町村金五代議員が北海道知事に就任され、倶楽部との交流も一段と活発になったのです。

札幌―東京間の往来も、飛行機は運賃が高く、利用する人はまだ少なかったのですが、汽車の便がよくなったのです。



理事内鹿と事務局長江崎
（右）＝39年サンの倶楽部新年会での様子

りました。所要時間二十四時間とずいぶん速くなり、外食券なしで駅弁が買えるような世の中になっていました。

道東京事務所は、業務が拡大するにつれ職員数が増えて手狭になり、銀座の北海道ビルに代わる事務所が必要になってきました。

三十六年、知事から国の斡旋で永田町に建設用地が確保できたので、新事務所を建築したいとの申し出がありました。

一方戦災で焼け落ちた歌舞伎座も復旧し、「辨松」から、業務を再開したので、北海道ビルを買い戻したいという希望があり、このため道は、銀座のビルを売却して建築費に充てることにしたのです。

その時の町村知事の説明では、「倶楽部には大変お世話になってきました。永田町に移転するにあたって

は、倶楽部が今まで同様の活動ができるよう、今と同面積の事務所、談話室、会議室を作り提供します。

ただし北海道ビルの売却費だけでは建築費が不足です。一、三年のうちには四階を増築するので、それまでは三階の狭いところですが、一時我慢してください」ということでした。

倶楽部側当事者だった理事の丸山喜代次郎（新橋演舞場支配人）南喜一（国策、パルプ会長）、野口保元（東京講演会理事長）の三氏が、知事を信用してこの申し入れを受けるとし、会員の了承も得ました。

この頃、倶楽部理事長の永田昌輝さんは、高齢のため辞意を表明されていきました。このため南さんは、後任に鹿内信隆さん（フジテレビ、ニッポン放送社長、由仁町出身）を推したのですが、そのときの説得が「鹿内ももう五十を過ぎただから、理事長を引き受けてもいいだろう」という命令調のもの。こうして三十七年、鹿内新理事長が誕生したのです。

鹿内理事長は、就任あいさつで、

「新しい発展的企画をたてたい」と語り、その後新年交礼会、北海道関係者も参加できる「北海道の夕べ」（後の道産子の会）、「趣味の同好会」などがスタートしました。同好会ではゴルフの北星会が発足、鹿内さんが理事長杯を寄贈されました。

このほか札幌オリンピック誘致運動、「開道百年記念行事企画」などに取り組むこととし、また月一回の会員による例会も開かれることになりました。

鹿内さんはご自身多忙な方で、「倶楽部の面倒を十分みるのができないので、私の代わりに」と、ニッポン放送の子会社ニッポンサービス社長神垣明吉さんを、常務理事事務局長として勤務させたのです。「給料はいりません」ということで

同時に創立以来の事務局長西野禎治さんが退任されました。

永田町道東京事務所が竣工、銀座（当時木挽町）から倶楽部が道庁とともに引越したのは三十七年暮れのことです

銀座から永田町へ

「給料はいりません」ということで

同時に創立以来の事務局長西野禎治さんが退任されました。

永田町道東京事務所が竣工、銀座（当時木挽町）から倶楽部が道庁とともに引越したのは三十七年暮れのことです

昭和二十五年、開発庁の宿舍用地として倶楽部が本郷林町に取得して、無償で貸与していた四百四十坪の敷地について、開発庁は、戦後のバラックなので、建て替えたいという希望を申し入れてきました。

それには地主である倶楽部の許可が必要になったのです。この土地の名義は取得当時理事長だった永田昌綽個人になっていましたが、実際は倶楽部の所有で、永田さんも「これは私のものではありません」と例会の席で明言されていました。

所有権確定の交渉が、開発庁との間で始まり、倶楽部の担当は南喜一さんでしたが、「せつかく話がまとまりそうになると、次官が代わるので、困ったものだ」と嘆いていたのを覚えていきます。

交渉が始まって三代目の次官に谷藤正三さんが就任されて、やっと話がつきました。内容は倶楽部の所有が三分の二、開発庁が三分の一にするとというもので倶楽部の土地を売却

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録 ⑥

し、その資金の一部で開発庁分の土地に官舎を建て、寄付しました。

このとき、土地を受け取る側の倶楽部に法人格がなかったので、開発庁から「この際社団法人になつてもらいたい。これによって倶楽部の内容が変わるものではありません」という申し出がありました。

社団法人である以上、定款で法人の目的を明らかにする必要があったのですが、たまたま経済主体のよう

な文になり、その結果それまでの倶楽部と異質なものになってしまったのです。

結局倶楽部は土地売却によって二千万円の資金を得たわけですが、この二千万円をどうするかが大きな焦点になりました。

道東京事務所の四階では、どうも倶楽部に相応しくないというので、中田乙一理事(三菱地所社長)、松

“幻の北海道会館”

田彰祐理事(日本ボブスレー・トボング協会専務理事)らが中心になり、この資金で土地を買い(当時百坪位買うことができた)、「株式会社北海道会館」(仮称)を建設しようという計画が持ち上がったのです。

拓銀の資金面での協力も得られる事になり、会館の上の部分は貸事務所にして、倶楽部の経費をまかなう。

その他の階には会員が常時集まる

理事長が反対

れる談話室、事務室、レストラン、バーも作るという計画でした。

会社設立趣意書、定款も準備され、多くの役員や会員も賛成していました。昭和四十六年頃のことです。

ところが当時の太田理事長は「現金で持っているべきだ」と強硬に主張されたのです。また「理事長の意見に賛成だ。さらに千万円ぐらい募金して基金を増やすべきだ」という

当時の二千万円は、今なら数億円になりますが、先輩が残してくれた貴重な財産を思うと胸が痛む思いです。

倶楽部が永田町に移転した三年後の昭和四十二年、道東京事務所四階が増築され、倶楽部に引き渡されました。

その時町村知事と佐々木事務所長が来られ、「やつと倶楽部との約束を果たすことができ、嬉しく思います。四階は倶楽部のものですが、倶楽部が使わないときは、私どもにも使わせてください」とはつきり申されました。私は今でも四階の使用権は倶楽部にあると信じています。

土地売却

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」



会館建設に動いた松田氏(左)と中田氏

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

⑦

開道百年

昭和三十九年以後四十年代は、まさに「北海道倶楽部ここにあり」の行事が企画され、次々に実行されてきました。

「開道百年記念第一回北海道美術展」がその一つです。昭和四十三年は風雪百年、開道百年の記念すべき年でした。倶楽部としても何か記念事業をという声上がり、野口保元さん（東京講演会理事長）から、「北海道には開拓の苦難の中から多くの芸術家が生まれている。その人たちの作品を一堂に集めた展覧会を倶楽部主催でやろう」という提案がありました。



北星会 北見・網走ゴルフツアーの一行
昭和51年8月美幌峠で

早速準備にとりかかりました。当時一流のギャラリーは三越または高島屋。とくに三越は三年も前から予約が必要で、しかも十一月三日の文化の日の週を希望したため、なかなか受けてもらえず交渉は難航。

最後に三越側は「山口蓬春画伯の新作を一点出していただけのならお受けします。但し貸しギャラリー料

北海道美術展開く

はいりません」という条件を出してきました。

それから野口さん、神恒事務局長の、葉山の蓬春邸訪問が始まりました。山口画伯は松前町の出身。昭和四十年には文化勲章を受賞した画壇の重鎮です。

交渉は奥様との間で何度か行われたあと、北海道のためならと了承され、三越と契約できたのです。

その後出展者との交渉が始まり、日本画は山口蓬春、岩橋英遠、洋画

は中村善策、三岸節子、小島貞佐吉、彫刻家加藤顕清、本郷新など五十人の日本を代表する、きら星のごとき作家の展覧会となったのです。

蓬春画伯は健康を害されていたため、新作ではなく、以前描かれたものを展出していただきました。この超一流の美術展の成功は、野口さんはもちろん、鹿内理事長その他多くの会員の献身的貢献の結果でした。

この美術展に先立ち、開道百年記念式典が昭和四十三年九月二日、天皇、皇后両陛下ご臨席の

もとに、円山競技場で行われました。佐藤栄作首相、町村知事二万人の道民が出席盛大な式典でした。陛下がご宿泊されたホテル三愛（現パークホテル）

は、私も設計に参加した思い出のホテルで、感慨ひとしおでした。またこの年、ゴルフ同好会北星会に、佐藤栄作首相から開道百年記念として、総理大臣杯が寄贈されました。

三十九年の倶楽部新年会に当時開発庁長官だった佐藤氏が出席されましたが、このとき自民党総裁選の前

で、ゴルフ談義に花が咲いていた席で「先生が総理になられたら、北星会に総理杯を寄贈いただけませんか」とお願いしたところ、お酒も入って上機嫌だった佐藤さんは「その時は必ず出させてもらうよ」と答えられ、それが実現したわけですね。

ところで北星会は三十八年、高井義次さんが、倶楽部会報にゴルフの話を書いたのがきっかけで誕生しました。

当時はまだゴルフをする人が少なかったのですが、倶楽部の例会でこの記事が話題になり、同好者が結構いることが分かって、それではコンペをやろうということになったのです。

北星会に総理杯

こうして第一回大会が十一月二十一日、多摩川河川敷の新川崎ゴルフリンクスで開かれました。

名前も「北星会」とつけ、倶楽部の正式行事として春秋二回開催を決めました。ゴルフの好きな鹿内理事長もすぐ理事長杯を寄贈され、四十年の歴史を持つ北星会になったのです。

北海道倶楽部の歴史の中で、最も社会的に意義のある画期的事業として記憶に残るものに、「北海道勤労青少年センター」の設立と、その運営をしたことです。

昭和三十年代後半、経済が急成長するに伴い、首都圏では、大量の入手が必要となり、東北や北海道から中卒者の集団就職が始まりました（当時高校進学率は三〇％）。

しかしなにぶんにも十五歳の少年、少女で、中には問題を起し、新聞沙汰になることもありまし

た。当時の町村知事はこのことを大変心配され、子供たちが困った時、気軽に相談に乗り、面倒もみるような組織を、倶楽部が引き受けてくれな

いだろうかという要請が知事からあったのです。倶楽部としても、とても意義のあることなので、道から年間二百万円の委託費の支給を受け、「北海道勤労青少年センター」を設立することにしました。

しかし委託費だけでは不足で、倶楽部も百万円を抛出し、計三百万円の予算で運営することになりました。

どのような組織で、どんな仕事をするかを検討するため、倶楽部に青少年委員会（後に青少年部会）を作り、委員長に大淵源治さんが就任、私も含め数名の委員で構成されました。

また専任の指導員として元教員の

大内寿子さんに、給与は委員会持ち、身分は道の嘱託で来ていただきました。こうして受け入れ体制ができました。

昭和四十四年、全道から上京した若者千六百人に対し、歓迎会を兼ねたセンターの説明会を開きました。この人たちを支店別に割り振り、日曜日ごとに五回に分けて行ったことが思い出されます。大半の人が定時制高校に進学、後

に大学へ進む人もありましたが、お互いの出会い、親睦の機会を作るため、地区別対抗ソフトボール大会、ボーリング大会、都内見学会、クリスマスパーティ、雇主との懇談会、大内さんの職場訪問指導など、様々な行事を実施しました。

多くの方から感謝されましたが、その頃社団法人になった北大卒業生の「エルム会」

勤労青少年センター設立

金をいただくというようなこともありました。しかし毎年千人ほどあった集団就職者も、だんだん少なくなり、高校全入が実現した四十九年ごろには、事実上なくなっていました。

三年間面倒をみることにしていた対象者がなくなったことから、五十二年に、設立当初の目的は達成したという

委託の道

部会そのものは六十年ごろまで存続、この間センターで知り合った人たちで自主的に作った「北友会」のお世話などをしていました。このほか北海道倶楽部の会員が、世話人になって催されていた会には、当時椿山荘の屋外で、お昼に開かれていた「サッポロ会」（現在の道産子サッポロビール会）や、野口保元さんが主宰する「北海道友の会」などがありました。

また倶楽部副会長の教納清さんが、日本ユネスコ協会会長を務められていたことから、倶楽部の有志らが在京北海道人ユネスコ協会を結成、創立総会議長を私が務めさせていただきました。

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

⑧

集団就職

神垣部会長、辰野副部長は辞任しました。



上京した若者たちの歓迎会で挨拶する町村道知事

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

⑨

道産子の会

現在倶楽部の最も主要な行事である「道産子の会」第一回は、昭和三十七年九月二十八日東京・芝の八芳園で、会員とその家族中心の会として開かれました。会は「北海道交歓パーティー」と名付けられ、参加者は約四百人(当時会員数は九百五十人)。鹿内理事長の計らいで生バンドが入り、北海道出身歌手の賛助出演もあり、大変にぎやかで大成功でした。

翌年は、事務所が銀座から永田町へ移転する作業もあつて中止となりましたが、三十九年東京オリンピック

クの年に再開することになりました。

この時会員以外の在京北海道人も呼びかけ、北海道人全体の会にしてはどうかという話が持ち上がり、準備に入ったのです。

どんな会でも創立時の苦労は大変ですが、一番の問題は、どんな方法で案内状を送る対象者を探すかという

芸能人も多数参加

うことでした。

試行錯誤のあげく、戦前より道内にあつた庁立、市立、私立の旧制中学(全道で約二十校)の卒業者名簿を集め、その中から東京在住者をピックアップして、千二百通程の案内状を送りました。ところが八百通近くが返送されてきた

上に、さらに返事をもらえたのは三百通ほどで、世話人一同がっかりしたことを覚えています。

しかしともかく苦労の末、サンケイ会館での開催に漕ぎ着けることができました。倶楽部には入手がな

いため、道新をはじめ北海タイムス、HBCなどマスコミ五社の協力をいただいたのですが、この時は四百五十人の参加者がありました。その後年々参加者が増え、会場も八芳園からホテルニューオータニ「鶴の間」に変わりました。これはニューオータニが札幌に進出したので、その宣伝になるからと、八芳園と同じ費用で結構ですという申し出があつたからです。

その後会場が変わり、ウエステインホテル東京になり、現在に至っているわけです。最初の会の頃は、全員が氏名、出身地を書いた紙の帽子をかぶり、また畠山みどり、また十代だった十勝花子さんなど道内出身芸能人、大鵬などの道出身力士、さらにはオリンピック入賞者も大勢参加して会は大

変盛り上りました。

昭和六十二年は、昭和天皇のご病気が思わしくなく中止されましたが、今年第三十九回を迎えるまでになりました。

初期のマスコミ五社の積極的な協力の中で思い出されるのは、今は廃刊となった北海タイムスの西脇春夫さん(後の東京支社長)が、小さな体で動き回っておられたことです。

回を重ねるごとに内容も充実、アトラクションも多彩になり、また多くの協賛によって豪華な景品が、福引き抽選会を盛り上げています。事務局はじめ担当者の献身的な努力の賜物でしょう。

昭和37年発足

次回は札幌オリンピックのことを書いてみたいと思います。

この時倶楽部が札幌オリンピック・モニユメントを寄贈し、それが真駒内競技場に残っていることを知っている人は、もう少なくなつたのかもしれない。

(注) 以下次の機会に掲載予定



「北海道交歓パーティー」で談笑する野口保元さん(東京講演会理事長)

半世紀を越えて

（下）

北海道倶楽部回顧録

北海道倶楽部常務理事

辰野清隆著

（役職は当時）

会報「北海道倶楽部」平成十四年三月から平成十五年八月までに連載した15の記事のうち平成十五年十二月号までの9回を（上）として平成二十三年度会員名簿に再掲したが、以後の6回とあとがきを今回掲載した。本年1月6日公益社団法人北海道倶楽部に移行し、公益社団法人として過去の倶楽部の事業を再認識することが出来ると思う。著者は辰野清隆さんである。表記の年数、役職名等記事は原則として、掲載時のままとした。写真で不鮮明なものは差し替えてある。（注）は編集者の独断で記した。

北海道倶楽部の記録 「半世紀を越えて」

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

10

昭和四十七年(一九七二)札幌オリンピックに、わが北海道倶楽部が果たした功績は絶大なものがありました。

その象徴として、三十年を過ぎた今も真駒内主競技場入り口に、本郷新作「舞う少女像、札幌オリンピック記念碑」(注一)が厳然とそびえ、その台座に「贈北海道倶楽部」と刻まれています。

この記念碑は、札幌オリンピックの記念になるものを残そうということで、鹿内理事長が本郷さんに依頼したもので、製作費三百万円は、同理事長や有志が出しました。これを北海道倶楽部が贈ったことにしたのです。

昭和三十年代後半、新生日本最大



立碑記念
場に輪
競技場
内冬季
真駒内
も札幌
今つ舞

札幌五輪

のイベント東京オリンピックの開催が決まり、世の中が沸き返っていました。

札幌冬季オリンピックは戦前の昭和十五年、東京オリンピックと同時に開催が決まっていたが、戦争のためにも返上された経緯から、東京だけの開催は納得できない、ぜひ冬季オリンピックも札幌に誘致しよう、北海道関係者は官民あげて運動を始めました。北海道倶楽部も協力しよう、鹿内理事長を先頭に行動を起こしたのです。

最初に立候補した四十三年大会はグルノーブルに敗れましたが、次の四十七年大会は、ローマIOC大会で札幌開催が決まりました。

この時ローマに居られた阿部武彦さん(現ヒノキ新薬社長・北海道倶楽部理事)は、八田IOC委員からその知らせを受け、同委員と祝杯を上げたそうです。

こうして早速札幌オリンピック冬大会組織委が結成され、会長に経

団連会長植村甲午郎氏、三人の副会長にIOC委員竹田恒徳氏、札幌市長板垣武四氏、学識経験者として北海道倶楽部理事長の鹿内信隆氏が選ばれました。このことでも倶楽部がいかに社会的に認められ、重要な働きをしていたかを知ることができるでしょう。

ところが喜びも東の問意外な難問が生じました。開催国は原則全種目に出場する義務があることが分かったのです。橈競技はそれまでわが国

記念碑「舞う少女像」

には全く無かったもので、困った組織委は、誘致に協力したついでにこれも引き受けてほしいと倶楽部に要請してきま

倶楽部が寄贈

した。このため倶楽部の有志を中心に、「日本ボスレー・トボガニング連盟」を設立するこ

とになりました。連盟最高責任者の理事長に倶楽部理事の松田彰祐氏、連盟理事に野口正二郎氏(合同酒精社長)、辰野清

隆が就任しました。

しかし競技については暗中模索あるのは情熱のみという状態で

た。ボスレーについては競技ルールの研究、選手の養成、コース・関連施設の建設など、松田さんは世界連盟総会への出席をはじめ、用具の調達購入のため、自費で度々海外出張されていました。

当時、イタリアでボスレーの中古橈を二百万円で買わされたと憤慨しておられました。私財を惜しげもなく提供されていたのです。

アマチュアリズムの徹底した大会で、資金の手当てには大変苦労しましたが、それでも手稲山に総工費約四億円でボスレーコースを建設、四十六年のプレオリンピックに間に合わせました。この時気温が異常に上がったため、せつかく張った氷が溶け、夜間競技でしのいだつらい思い出が残っています。(注一) 現在

「雪華の像」として本郷新記念札幌彫刻美術館のHPに掲載され、倶楽部の寄贈についても記されている。平成24年1月倶楽部で補修した。

昭和四十七年二月三日、待望の雪と氷の祭典第十一回オリンピック札幌冬季大会の開会式を迎えることになりました。前日は猛吹雪で、明日の天気が心配になりました。

しかし天皇陛下がご臨席されることで、晴れることを信じて当日の朝を迎えました。すこく寒い朝でした。しかし風もなく、素晴らしい開会式日よりなつたのです。

開会式は本当に質素なもので、二十個の風船を片手に持った普段着の小学生豆スケーター八百人がトラックを一周し、一斉に風船を空に放したのが唯一つのアトラクション。我々役員はトラックの回りで、子供が転んだりしたときに助ける役割でした。

さて期待のボブスレーは、雄大な眺めの手稲山を背景に二人乗り、四人乗りの鉄橋で、最高時速百二十キロ、四回の滑走合計タイムで、百分の一秒を争う熾烈な争いが繰り広げられたのです。

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

⑪

倶楽部役員が活躍

初出場の日本チームは、残念ながら転倒などもあってほとんど最下位。二人乗りは西ドイツB組、四人乗りはスイスA組が優勝し、太田連盟会長（北海道倶楽部理事長）が雪で作った表彰台に上がった入賞者にメダルをくれました。

長い準備の末、わが国が獲得したメダルは、競技種目が少なかったこともあって、ジャンプの金銀銅各一個に終わりました。

こうして無事に閉会式を迎え、IOCプランデージ会長から「運営が立派だった」というお褒めをいただき、役員一同喜び合ったものでした。

夏のミュンヘン大会でイスラエルの選手が襲われ、多数の死傷者を出したことがあり、札幌大会が無事に終わったことに感無量の思いがしたものです。

このオリンピックにより、札幌の街に地下鉄や地下街が出現、その後

続札幌五輪

の発展のきっかけになり、また全世界にその名が知られることになりました。



札幌五輪役員服を着て授与された感謝状を持つ辰野さん

この地下鉄にはゴム輪が採用されましたが、電気系統の企画に参加されていたのが、前倶楽部副会長の湯川龍二さん（当時帝都高速度交通営団理事）でした。

戦前の冬季オリンピックにわが国が初めて参加したのは、昭和三年の第二回サンモリッツ大会です。

地下鉄も開通

現倶楽部常務理事 高橋昂平さんの父上 昂氏が距離競技に主将兼選手として、さらに昭和十一年ガールミッシュバルテニールヘン五回大会（ベルリン大会の冬）には、札幌大会でボブスレーの役員もされた当時三十歳の野口正二郎さんと共に役員として参加されました。

ジャンプの伊黒正次さんは自ら考え出し、現在主流をなす前傾姿勢（鼻ほじりジャンプと揶揄された。）で、一回目七十五歳の最長不倒距離を出して驚かせましたが、二回目は張り

切り過ぎて失敗、七位に終わりました。しかし遠い日本から来て万丈の気を吐いたことは間違いないです。

行きは当時最も早い交通手段ンベリア鉄道でしたが、それでも十八日かかりました。帰りはマルセイユから四十日の船旅で、その榛名丸には、パリ万博日本館の設計でグランプリを受賞した私の恩師坂倉準三先生も一緒でした。それがきっかけでその後も野口さん、伊黒さんとはお付き合いいされていました。（後に野口、伊黒両氏は倶楽部理事）。

ほかに札幌大会では、わが国には無かった距離と射撃を組み合わせたバイアスロン競技に、故八木祐四郎さんが監督として活躍されていました。

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

12

趣味の会

北海道倶楽部には、昭和三十八年に発足、四十年間に百四十四回コンペを行った実績を持つ「北星会」、四十五年発足、八十五回の大会を行った「囲碁同好会」、五十二年発足七十七回の大会を数える「麻雀同好会」、「写真同好会」など、それぞれに長い歴史を持つ趣味の会があり、会員相互の出会いの場として親睦部会(注)がお世話をしています。

「北星会」については、本稿第七回で発足のきっかけや、佐藤榮作さんから総理大臣杯の寄贈を受けたエピソード等を書きました。昭和



年四回開かれる囲碁大会

三十八年十一月二十一日、多摩川の河川敷にあった新川崎ゴルフリンクスが第一回コンペの場でした。

会発足の頃に倶楽部に入会された日本アマチュアゴルフ界の第一人者松田彰祐さんが、会のお世話をしてくださいました。コンペの賞品等は品物現物を渡していましたが、もちろん急便もなく、私が車を出してお手伝いし、そのことから「北星会」は私を世話人に指名しました。

五十年九月、松田さんが亡くなり、私が代表で世話人を務めました。組織が変わって親睦部会の一部になって、篠田耕一さんが代表幹事に就任、その後再び私が代表幹事になり、今日に及んでいます。初期の頃は篠田弘作代議士、椎熊三郎代議士のほか会社の社長、役員も多く参加されていました。

四十三年町村知事から知事杯が贈られ、以後堂垣内、横道、堀知事からいただいていた準優勝杯としています。また四十三年、総理になられた佐藤榮作さんから、約束の総理杯を四個のレプリカ付きでいただきました。以後田中、福田、大平、鈴木、中曽根、竹下と、歴代総理から寄贈を受け、優勝称として「北星会」にとって重みのある賞となつて受け継がれています。

「北星会」に総理杯

多彩な活動

総理が変わる度に切り切り戦をおこなってきましたが、現在は竹下杯の持ち回りになっています。「北星会」は当初年二回開催でしたが、四十八年から年四回となりました。松田さんは、関東シニア選手権に四十六年から三年連続優勝、当時日本シニアはなかったもので、実質的にこれがシニア日本一の証明といえるものでした。倶楽部はもちろん、札幌オリンピック、北星会、そしてアマチュアゴルフ界に松田さんが尽くされた功績は計りしれないものがありました。

「北星会」は四十七年から十回の北海道ツアーを実施、地元の方々とも一緒に回り、親交を深めました。当初「北星会」に参加された思い出の方々を記します。岡田包義、大西泰助、高井義次、野口小太郎、一田務、栗山健吉、秋田茂、南喜一、堤清七、伊東尚、大津慶吾、谷藤正三、福島実、米田一男、数納清、町村金五、田中文雄、岸鶴一。

囲碁同好会は、以前から倶楽部に碁盤があり、会員が談話室で打っていましたが、四十五年に正式に発足しました。太田剛さん(六段)など強豪が揃っていました。その後一時中断していましたが、篠田さんのご母黨が「紅友会(日本棋院女流アマチュアの会)」の中で活躍されており、倶楽部と紅友会メンバーが対戦することで復活しました。

麻雀同好会は、五十二年に長内さん、神垣さんが発足させたものです。なお趣味の会にお気軽にご参加ください。大歓迎です。(注現在、北星会と囲碁会が独立運営・独立会計で活動している。)

昭和二十三年戦後の大混乱の時代に、永田昌緯理事長のもと北海道倶楽部が創立されましたが、もはや戦後ではないといわれた三十七年、鹿内信隆理事長が就任され、「道産子の会」、ゴルフの北星会、札幌オリピック、開道百年記念美術展、勤労青年センター設立などいろいろな企画が計画実行されました。

毎月の会員例会や役員会も活気に満ちていました。五十年に役員七十五歳定年制が発足して倶楽部の様相も変わりましたが、それ以前に



昭和52年ごろの北星会の面々(霞ヶ関CC)

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

13

忘れ得ぬ人々(上)

例会や役員会でお目にかかった思い出の方々を紹介したいと思います。(順不同、敬称略。肩書、役職等記憶違いもあると存じますがご了承下さい)

野口保元(東京講演会主宰、北海道友の会会長、早大校友会)は戦後倶楽部創立を呼び掛け、その運営指導の中心の方で、温厚篤実かつ献身実行、絵を描く文化人で真に“大人”の風格ある人でした。

野口小太郎(北海道新聞東京総局長)は、創立時事務所を提供するな

画期的な

ど創立の功労者。「北星会」を創立した終身理事だった。

永田昌緯(初代理事長、戦中拓銀頭取、北海道曹達会長)は、一言で言えば偉大な指導者。目的を決め、適材適所に仕事をするように仕向けるのがうまかった。倶楽部を楽しく、郷土愛に基づく奉仕の精神を發揮させ、会員の尊敬を一身に集めた。創立時の倶楽部の大きな支柱。

岡田包義(官選最後の知事)は倶楽部創立時の指導者であり、東京・本郷林町の土地購入を担当、絵を描き、ゴルフもやる多趣味の文化人。

篠田弘作(衆議院議員)はあらゆる面で北海道のため、倶楽部のため献身的に動いた。倶楽部の行事には多忙の中常に出席。戦後の北海道の発展に計り知れない功績を残した。

丸山喜代次郎(新橋演舞場支配人)は弁松ビル買収、倶楽部事務所なら

鹿内時代

せ、会員の尊敬を一身に集めた。創立時の倶楽部の大きな支柱。

岡田包義(官選最後の知事)は倶楽部創立時の指導者であり、東京・本郷林町の土地購入を担当、絵を描き、ゴルフもやる多趣味の文化人。

篠田弘作(衆議院議員)はあらゆる面で北海道のため、倶楽部のため献身的に動いた。倶楽部の行事には多忙の中常に出席。戦後の北海道の発展に計り知れない功績を残した。

丸山喜代次郎(新橋演舞場支配人)は弁松ビル買収、倶楽部事務所なら

びに道東京事務所確保など倶楽部のために献身的な働きをされ、幅広い人脈を持っていた人。

西野禎治(倶楽部創立時の事務局長、北海道学生後援会)まとめ役としてうってつけ。この人が入れたコピーはうまいと評判だった。

鹿内信隆(二代目理事長、最年少三十六歳で経団連理事、ニッポン放送、フジテレビ創業社長、産経新聞社長、彫刻の森、上野の森美術館理

事長、札幌オリピック副会長、その他多数)北海道出身稀有の経済文化人。「道産子の会」など、現行行事のほとんどは同理事長時代に企画された。軽井沢CCでホールインワンを達成されたお祭り、私も記念品を頂いたことが思い出されます。

松山茂助(日本麦酒社長)は小柄な人。例会は皆勤、寡黙で、俳句と絵が趣味の文人。当時は貴重だったビールをよく例会などに差し入れていただいた。

歌手の歌の点

加藤顕清(本郷新さんの前の芸術院会員、彫刻家)は藤沢のアトリエから例会に出席された。

小林千代子(歌手、三浦環顕彰会主宰)。ヒット曲は「涙の渡り鳥。華やかな紅一点。高橋掬太郎(詩人)は「酒は涙かため息か」、「泣くな小鳩よ」、「古城」

「並木の雨」、「ここに幸あれ」など多くのヒット曲を作詞。作曲家では八洲秀章。「高原の旅愁」マリモの歌など。ダンディな人だった。

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

14

忘れ得ぬ人々(下)

北海道倶楽部にはユニークな元陸軍軍人の方がおられた。大山量士、有末清三の二人。大山は本名佐々木武雄で北海道出身の陸軍大尉。終戦当時東京警備軍横濱警備隊長として鶴見総持寺にあった本部にいた。

昭和二十年八月十四日、佐々木大尉は、終戦阻止のため、「国民神風隊」を結成、首相官邸を襲撃したが目的を果たせなかった。戦後戦犯に指名され、十四年間地下に潜り、姿を現した時は大山量士と名乗った。講和



北海道北道大町でもあった義経研究家
北海道観光産業振興会会長(中央)

後罪滅ぼしのためとアジア友の会を主宰、国が無関心だったアジア留学生の支援活動に努力した。

有末清三は陸軍参謀中将で、敗戦時マッカーサーを迎えの責任者となった。在郷軍人会会長、日本遺族会会長だった。

松田彰裕は関東シニアゴルフ選手権者。大町北造(小樽板谷一族、北

多彩 文人、粹人、軍人

海道観光産業振興会会長)は「義経はジンギスカンだった」の義経研究者で、驚異的人脈を持つ。

阿部武夫(ヒノキ新業社長)に、なぜ化粧品会社かと伺ったところ、「戦前女性に散々だまされたので、取り返そうと化粧品を考えたのです」ということだった。現会員の阿部武彦社長はご子息。

南喜一(国策バルブ創業者、会長)は、東京本郷林町の土地処分問題で開発庁と交渉、倶楽部財政基盤

を作った功労者。艶福家で「ガマの聖談」の著者として有名。

能戸英三(全千島復帰返還の会理事長)、全千島は日本の領土、だれも返還運動をしていない時代、黙々とガリ版刷りの意見書を配布していた熱血漢。

町村金五(衆、参議員、知事)。倶楽部を心から愛した人。参議院議員で晩年ゴルフにお誘いし、私と篠田耕一さんがお供をした。ボールが林に入ると、

フエアウエーに持つてきておいた。先生最後のプレーだった。

高井義次(東洋製網社長)創立時最年少理事。剣道八段、範士。倶楽部に新風を送った。大西泰助(北海商船、新潟商船倉庫社長)は温厚篤実、小柄な人。人の面倒をよくみた。

野口正二郎(合同酒精社長)。小樽出身、札幌冬季オリンピックの役員。ドイツ冬季オリンピックでも役員として渡欧した。日本でのワイン

普及に貢献、フランスから勲章を受ける。

佐藤貞(雪印社長)は農夫然とした人。質実、温厚。地崎宇三郎(地崎組社長、衆議院議員)。将棋が強かった。麻布永坂更科で、よくそばを食べながら北海道の現状や将来について意見を拝聴した。

石原栄太郎(ホテル龍名館支配人)は「レストラン十勝」開設。栗山健吉(小樽出身、東京海上役員、東海不動産社長)幅広い趣味を持っていた。俳号は北生で句集も刊行。

谷藤正三(道開発庁事務次官)。本郷林町の倶楽部所有地の処理に当たられた。退官後は倶楽部理事に。小坂佐久馬(教育出版社社長)は、戦時中いわゆる「綴方教室事件」首謀者としてあらぬ疑いをかけられ検挙されたが無罪に。江戸英雄さんと桐朋学園を創立。酒を愛し、飲み仲間で「有情会」を作った。

数納清(朝日生命社長)は日本、世界ユネスコ協会会長。なかなかの粹人。神垣明吉(ニッポンサービス社長)は、鹿内理事長時代の事務局長。倶楽部の基礎を作った。

異色の義経研究家

戦後の混乱の中で、北海道倶楽部が創立されて半世紀を越えました。その頃の北海道は、国内エネルギーの中心である石炭、農林漁業など、当時わが国の希望の大地といわれていたのです。

その中であつて、草創期における混乱の中、そして戦後の復興期、さらに経済拡大発展時代に、倶楽部のため献身的に携わった人々の様子や、倶楽部の業績をまとめることができましたことは、誠に感慨深いものがあります。

創立早々焼け野が原の東京に、道庁の東京事務所と、倶楽部事務所としての「弁松ビル」取得。開発庁職員宿舎用として東京・本郷林町に倶楽部が土地を買い求め、同庁に無償貸与、その土地の処分のため倶楽部の社団法人化、結果として二千万円の基金を取得。

「開道百年北海道美術展」、札幌オリンピックへの貢献、中卒集団就職者のための北海道勤労青少年セン

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

(完)

執筆終えて

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」

ターの創立・運営、「道産子の会」の発足、ゴルフ、囲碁、麻雀等趣味の会の設立、「北海道交流ツアー」、そして毎月の会員例会、役員会、新年会、叙勲者表彰会など、倶楽部が最も活発に活動し、輝いていた時代の、昭和三十年代から四十年代の倶楽部の歴史を振り返り、十五回にわたり連載した回顧録も今回で終わります。

現在会員の増強が計られています。が、当時倶楽部の会員になることは、東京にとは、東京における成功者と認められることで、入会希望者は大勢いました。しかし資格審査は厳しく、保留ということで入会を断つた例は相当数になったのです。

倶楽部そのものが魅力ある活動をするので、入会希望者が増えるのではないのでしょうか。倶楽部は公平な立場で、総論より具体的な各論を提言することが大切なことと考えま

魅力ある倶楽部に

具体的提言を

す。そこで最後に私の具体的な提言ですが、今日北海道の現況は全国的にみて、インフラ整備の遅れが経済不振の原因となり、まことに憂慮すべき有様です。

とくに私の出身地北見や道東地区は、便利な道央に移住するものが多く、大変な勢いで過疎化が進行しています。

人口比例の諸制度のもとでは、将来の希望を失いつつあるのが現状です。今日首都圏で仕事をして日帰りできないのは、全国で北海道（道央を除く）だけです。

北海道は四国、九州を合わせたより広いのです。四国、九州には十二の県があり、それぞれの県に夜間駅機空港が整備されていて、早朝出発して遅い時間に帰着できるのです。

北見（女満別）、釧路、帯広、中標津、函館では、羽田から飛んできたのが一番機で、昼過ぎに羽田着

帰りの最終羽田発は四時ごろで、何をするにも一泊しなければならぬのです。理由はいろいろありませんが、広い北海道を有効に振興するため、すべての空港をナイトステイ空港として、首都圏と日帰りができるように、またインフラの整備により、地元が希望を持てる地方になるようお願いします。

戦後から復興期に、倶楽部が道庁や開発庁にも、今の常識では考えられない援助をし、そしてふるさと北海道の発展に倶楽部が尽力していた当時を見聞し、多くの事業に参画した私にとって、先人の偉業を記録に残すことができたことは大変嬉しく、関係者に心から感謝し、お礼を申し上げる次第です。



札幌冬季オリンピック開会式 倶楽部も貢献

半世紀を越えて

北海道倶楽部回顧録

創立以来半世紀を越えた北海道倶楽部の創立から、昭和40年末頃までの四半世紀に渡る倶楽部の輝かしい歴史を、回顧録として綴らせて戴くことに、援助協力を頂いた方々に、先ず感謝とお礼を申し上げます。

かつて倶楽部は道と一体となつて、北海道振興に数々の寄与していたことを、本稿によつて多くの方々に知って戴けたと思います。私利私欲を越え、純粹に北海道のため、故郷のためを願つて活動されていた先輩諸兄の姿が、今も目に浮かんで来るのです。

戦後、焼け野原にわずかに残つていた貴重な「弁松ビル」の買取取得に

より、そのビルが北海道庁東京事務所、北海道倶楽部事務所となり、活動の拠点が出来たとどしてした。又昭和25年北海道開発庁発足に際し予算がないことから、倶楽部に援助を求められ、倶楽部が職員住宅用地

あとがき

を買ひ付け開発庁に無償貸与、後にこれを処分して開発庁に宿舍を建設寄贈し、残り2000万円を倶楽部の基金としたのです。そのため倶楽部を社団法人化したのでした。

昭和30年末頃より札幌冬季オリンピック大会誘致運動、開催決定後、当時我が国には橋競技がなく、倶楽部有志により日本ボブスレー連盟を設立しその運営を行いました。また鹿内理事長は組織委員会副会長に就任され、札幌大会の成功に貢献したのでした。更に今に残るオリンピック記念モニュメントを倶楽部の名のもとに寄贈したのです。

倶楽部は北海道へ大変な寄与

昭和43年、風雪百年、開道百年に際して三越ギャラリーにおける倶楽部主催による「北海道美術展」、44年中学卒集団就職者の為、町村知事の要請により「北海道勤労青少年センター」の設立運営を引き受け、数

千人の方々をお世話したのでした。

今に続く「道産子の会」、「ゴルフ同好北星会」、囲碁麻雀等趣味の会の創立等、誠に忙しく、又それらの事業には時間と費用も必要でしたが、担当された人達

は全くのボランティアだったのです。その頃の会員例会や役員会には、町村金五先生や堂垣内知事も上京さ



著者近影 (平成21年)

れているときは顔を出され懇談の中に入られるなど、当時は道庁と倶楽部は一体で自由に意見の交換がありました。倶楽部が今もその存在に重要な地位を得ていることは、先人達のこれ

らの功績が有つての事を忘れることは出来ません。私はこれらの事業の殆どのものに参加し、その時代を承知している事から、この度先人の業績を書き残す事が出来、當時を知るものとしての義務を果たすことが出来、改めて本稿を起すことを支援してくださった関係者に、心からお礼を申し上げる次第です。多くの、今は亡き先人に思いを致し感無量のものがあり、その霊の安らかなことを祈り筆を置きます。

平成十五年十月吉日 辰野 清隆

| | | |
|--------|----------------------------------|----------------------|
| 林 儀作 | 函館市新川町二九五 | 道會議員 |
| 林 路一 | 北海道十勝郡富良野市 東京府千代田区長崎町一九四九 | 衆議院議員 |
| 林 駒之助 | 札幌市北三條四丁目官舎 札幌市北三條四丁目官舎 | 北海道廳 |
| 林 幾太郎 | 東京府中區西區市ヶ谷加賀町 二ノ一八 | |
| 林 友作 | 東京府外務省町松島町八八 | 青山七六一三 逓海郵船會社 |
| 林 長左衛門 | 札幌市北三條一三三 | |
| 林 純一郎 | 札幌市北三條一五 | |
| 阪東 瀧平 | 東京府下中野町打越一九六 六 | 九 |
| 八、二之部 | | |
| 阪東 幸太郎 | 北海道旭川市三條通 旭川市下谷區西區門町二三 吉田方 | 衆議院議員 |
| 件 房次郎 | 北海道小樽市 | 小樽高等商業學校 |
| 二之部 | | |
| 二木 貞吉 | 釧路市渡尻 | |
| 新渡戸 稻造 | 東京府小石川區小日向台町 一ノ七五 | 小石川 二八五〇 貴族院議員 |
| 新田 啓二郎 | 札幌市南二四一 | |
| 西 美藏 | 東京府外務省町清水三六 〇四 | 銀座 三五八 北海タイムス東京支局 |
| 西 忠義 | 神奈川県大磯町台町一〇七 | |

俱樂部役員

昭和五年十二月一日現在
(いろは順)

| | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|---------|--------|
| 理事 | 坂谷 喜吉 | 磯野 進 | 橋本 正治 | 小笠原 菊次郎 | 岡田 伊太郎 |
| 幹事 | 太田 半六 | 渡部 道太郎 | 金子 元三郎 | 河原 直孝 | 高岡 直治 |
| 監事 | 高島 菊次郎 | 高橋 貞三郎 | 松野 禮助 | 船崎 平太郎 | 久保 兵太郎 |
| 三谷 一二 | 矢上 貞三郎 | 山本 厚三 | 安田 昌 | 船田 一雄 | 二神 駿吉 |
| 理事 | 阿部 貞夫 | 赤羽 克己 | 穴水 熊雄 | 東 武 | 佐藤 國物 |
| 理事 | 坂井 徳治 | 坂本 森一 | 木田 川泰彦 | 宮尾 舜治 | 阪本 作平 |
| 理事 | 美濃部 俊吉 | | | | |
| 幹事 | 門野 重九郎 | 清水 英嗣 | 牧山 清砂 | | |
| 幹事 | 伊藤 同馬 | 飯田 實 | 菊地 吉治郎 | | |

北海道俱樂部の記録「半世紀を越えて」

北海道俱樂部の記録「半世紀を越えて」

會員名簿

イ之部

姓名 郵便住所 電話 脚動先

飯田延太郎 東京市麹町區上六番町一〇 九段 二〇九 有隣生命保險會社

飯田實 麹町區丸ノ内昭和ビル 折原銀行東京支店

井上憲一 東京市小石川區小日向台町 二ノ二九 小石川 二四一四 王子製紙株式會社

井上一元 東京府北多摩郡三鷹村下連 雀六二 小石川 二四一四 王子製紙株式會社

井上宇太郎 小樽市堺町

イ之部

井出繁三郎 東京市赤坂區青山高樹町十 二 青山 二五〇 衆議院議員

伊藤増吉 宮崎市海岸町

伊藤司馬 東京市芝區横川町二一 小樽新聞社

伊藤龜太郎 小樽市船橋町四六伊藤組 請負業

石井良一 東京市京橋區銀座西六丁目 六番地七 札幌市市四十二吉賀方 札幌 一四〇一 留明鐵道會社

石井鉄太郎 北海道函館市 札幌 一八三九

石原健三 東京市外下大崎七 高輪 四七 貴族院議員

石原供三 札幌市道尾拓麻郡 北海 道廳

磯村豐太郎 東京市芝區高輪田町三〇 高輪 一二四九 北海道長嶺汽船株式會社

ハ之部

長谷川淑夫 函館市谷地町一〇〇 函館日々新聞社

波多野與三郎 札幌市市四四二

畑貫治 小樽市船橋町東三丁目

秦茂三 函館市東廣町二一

鳩山一郎 東京市小石川區香利町七ノ 一〇〇 牛島 三二〇〇 衆議院議員

萩原芳太郎 旭川市九條通十一丁目右四 號

イハ之部

ハ之部

橋谷甚右衛門 北海道函館市 札幌 三七五〇 札幌市役所

橋本正治 札幌市市役所 上京中旅館 札幌市市役所

橋本東三 札幌市下松澤村松原九七 四谷 一一九 北海 道廳

橋本幸次郎 北海道小樽市

橋本文平 函館市四郎舞

濱岡源之助 函館市眞砂町

服部幸一 札幌市大通東八ノ一

服部公治 小樽市折原銀行支店

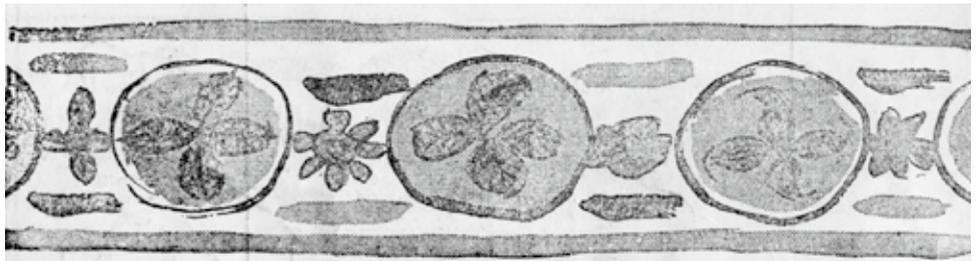
北海 道國大學



北海道倶楽部の記録 「半世紀を越えて」

月刊「北海道倶楽部」創刊號目次

| | |
|-----------------|-----------|
| 表紙 | 田中針水 |
| 表紙畫 | 田中針水 |
| 表紙題字 | 清水鍊徳 |
| □ 繪 | 筆谷等觀 |
| 卷頭言 | 美濃部俊吉(一) |
| いかによからむ | 高田保(三) |
| 村を出て | 子母澤寛(六) |
| 「北海道倶楽部」の創刊に際して | 佐上信一(八) |
| 春鯨漁業に就て | 倉上政幹(九) |
| 札幌農學校 | 高岡直吉(九) |
| 北海道新聞物語 | 矢上以久三郎(三) |



釣禪一如……………東武(三)

セパアード……………足立生(五)

競馬……………菊地延太路(七)

禪問答……………幽石道人(三)

函館復興餘談……………駄句庵主人(三)

大雪山由來記……………鹽谷忠(五)

郷土人紹介……………(四)

水の江瀧子 小林千代子 刈谷絹子

俳句……………(四)

郷土ニュース……………多田太吉編(四)

會員消息……………(六)

俱樂部便り……………(六)

編輯後記……………(三)

北海道倶楽部の記録「半世紀を越えて」